

*Silas Marner*にみるGeorge Eliotの児童観について
On George Eliot's View of Child Studied in *Silas Marner*

嶋田 貴美子
Kimiko Shimada

1

Silas Marner (1861) は *Scenes of Clerical Life* (1858), *Adam Bede* (1859), *The Mill on the Floss* (1860) について書かれたGeorge Eliotの作品の中では比較的短い小説である。その後 *Romola* (1862-3), *Felix Holt the Radical* (1866), *Daniel Deronda* (1867), *Middlemarch* (1871-2) と大作が続き、この小説を境にしてGeorge Eliotの作風が変わってきたことから、*Silas Marner*は、彼女の作品群のturning pointに位置するものとして重要な意義を持つ作品とみなされている⁽¹⁾。

しかし、この小説は作者自身が出版社にあてた手紙の中で述べているように、a story which came across my other plans by a sudden inspiration⁽²⁾(急に起こった靈感によって他の作品〔*Romola*のこと〕の計画と交錯して生じた物語)であり、a story of old-fashioned village life, which has untold itself from the merest millet-seed of thought⁽³⁾(古風な村人達の生活の物語でほんのちょっとした粟つぶのような思いつきから展開していったもの)であった。そしてさらに原稿の最初の $\frac{2}{3}$ ほどを送られた出版社のJohn Blackwoodの、作品の最初の100ページぐらいまでの物語の暗さ悲惨さを嘆いている批評に対してGeorge Eliotは、I don't wonder your finding my story, as far as you have read it, rather sombre : indeed, I should not have believed that any one would have been interested in it but myself (since William Wordsworth is dead) … (GEL, III, 382) (あなたがそれを読んだ限りでそのお話がかなり陰気なものだとお感じになったことは不思議ではありません。実際私は私以外に誰かがそのお話に興味を持ってくれるだろうなどとよもや信じてはいませんでした〔ウィリアム・ワーズワスはもう死んでしまったのですから])とも述べている。

これらのことからわかるように、George Eliotは*Silas Marner*を書くことは何はさておいてもしなくてはならない急務であるとは思いつつも、その作品の成功に対してかなりの不安感を抱いていたことがうかがわれよう。それにもかかわらずGeorge Eliotをつき動かし、そしてそれを彼女の作品群の中でも異色な不朽の名作として完成させたその動力となったものは、もちろん作者の文学的才能に負うところは多大であろうが、それに加えて彼女が幼年時代にふる里の村で見て以来彼女の脳裏から消えることのなかったhumble(みすぼらしい)'linenweaver'(織工)の姿であった。

周知のようにGeorge Eliotは、*Adam Bede*のIn Which the Story Pauses a Little (物語小休止の章)と小見出しがつけられた17章で自分の芸術論を述べているが、これは後に続々と出

版された彼女の全作品を一貫する思想であり、'homely existence' (人々の素朴な生活ぶり) を絵の中にしっかりと取りこんでいる彼女のオランダ絵画への礼賛の言明である。George Eliotはその絶賛するオランダ絵画に現れた人々のhumble lifeの中にある真実を文章によって論理的 (theoretic) に文学の世界において表現しようとしたのであった。その彼女の試みの最も顕著な例が*Silas Marner*であり、*Silas Marner*を深く読みとるためにはその17章が大いに役立つと思われるので一部を次に引用しておく。

I find a source of delicious sympathy in these faithful pictures of a monotonous homely existence, which has been the fate of so many more among my fellow-mortals than a life of pomp or of absolute indigence, of tragic suffuring or of world-stirring actions. I turn... to an old woman bending over her flowerpot, or eating her soritary dinner, while the noon-day light, softened perhaps by a screen of leaves, falls on her mob-cap, and just touches the rim of her spinning-wheel, and her stone jug, and all those cheap common things which are the precious necessaries of life to her; there is a great deal of family love amongst us.... ; human feeling is like the mighty rivers that bless the earth : it does not wait for beauty - it flows with restless force and brings beauty with it.... let us love other beauty, too, which lies in... the secret of deep human sympathy..... do not impose on us any æsthetic rules which shall banish from the region of Art those old women scraping carrots with their work-worn hands, those heavy clowns taking holiday in a dingy pot-house, those rounded backs and stupid, weather-beaten faces that have bent over the spade and done the rough work of the world, those homes with their tin pans, their brown pitchers, their rough curs, and their clusters of onions. In this world there are so many of these common coarse people who have no picturesque, sentimental wrechedness! It is so needful we should remember their existence,.... Therefore let Art always remind us of them...

(単調で素朴な暮らしぶりを忠実に描いたこれらの絵〔オランダ絵画〕に私はとても気持ちのよい共感の源を見い出すのです。そのような暮らしぶりは我々人間の極めて多くの人たちがたどる運命なのであり、それに比べて華やかな人生、極貧の人生、悲劇的な苦難に満ちた人生、世間を騒がせるような行動に満ちた人生なんてほんの微々たるものにすぎません。私はかがんで植木鉢の花をながめたり、または一人寂しく食事をしているようなおばあさんに目を転じよう。木の葉のふるいにかけてられたために多分やわらげられているであろう日の光が彼女の室内帽にふりそそぎ、そして糸車に、石がめに、彼女にとっては大切な生活の必需品となっている安価なありふれた細々とした物にまでその日ざしをわずかに投げかけているのです。…私たち平凡な人間の中にも大きな家族愛はあるのです。…人間の感情は大地を恵む大河のようなものなのです。それは美の到来を待つてはいません。それは抵抗できない強力な力で流れており、そうしながら美をもたらすのです。…もう一種類の別の美〔形態の神々しい美しさとは別の美〕も愛そうではありませんか。それは深い人間的共感の中にひそんでいるものなのです。仕事に

荒れはてた手でにんじんをごしごしこすっているおばあさんや、うすぎたない一杯のみ屋で休日を楽しんでいるのろまな田舎者を、すきにかぶさるようにして世間の力仕事をしてきた、背中が丸まり、まのぬけた日焼けした顔の人々を、そしてまた彼らが使っているブリキのなべや、茶色い水差しや、彼らが飼っている粗野な犬や、彼らが収穫した玉ねぎの束を「芸術」の領域から追放するような美学の法則を強制することはしないでもらいたい。この世の中はこのようなくありふれた粗野な人々で満ちており、彼らには画趣に富んだ感傷的なみじめさなんて全くないのです。私達はこのような人達の存在を決して忘れないようにすることが必要です。…だから「芸術」とは彼らのことを常に我々に思い出させるものであるべきなのです。）

*Silas Marner*の主人公Silasは、もちろんこの芸術論の中でGeorge Eliotが深い愛情をこめたまなざしでながめている素朴に生きる人達の一員であり、この引用文から想定される彼らのhumble lifeはまた、Silasのstone-pit（石切り場）での暮らしを彷彿とさせるのである。

人間の本来的姿がそのようなhumble lifeにあるとしてそれを自らの詩作の中心テーマに好んで用いたのはWilliam Wordsworth（1770–1850）であったが、Q. D. Leavis女史は上記の引用文に示されるGeorge Eliotの思想についてThis is more Radical than even Wordsworth's grounds for choosing humble life as the subject-matter for true poetry. And this Radicalism is an important constituent of *Silas Marner*.（これは、真実の詩の主題として質素な生活を選んでいるワーズワスの思想をもしのぐ「急進的な」見解である。そしてこの「急進主義」こそ『サイラス・マーナー』の重要な構成要素なのである）と言っている。

2

William Wordsworthは、DickensやThe BrontësやGeorge Eliotたちが構成するVictoria朝の一時代前の文学上の時代思潮・Romanticismを代表するイギリスの詩人である。

Romanticismは“Return to Nature”を叫んだJ. J. Rousseau（1712–1778）によりフランスで起り、やがてイギリスに波及していったのであった。その風潮は一口で言えば「限りなきものに対する（理智の要求ではなく）情意のあこがれ、すなわちShelly（Percy Bysshe Shelly・イギリスの叙情詩人・1792–1822）がいうようにThe desire of the moth for the star（星に憧れる蛾の願望のような気持）であった。Wordsworthの人生観の基調となっているものは「人間本来の尊厳に対する価値判断と人格に対する道徳的要求」である。そして彼は「自然を一種の生物とみなし、万物を通して神と霊交することができた神秘家」でもあった。

彼の代表作は親友Coleridge（1772–1834）との共作である*Lyrical Ballads*（1798）である。この中のWordsworthの詩の主題は日常生活（ordinary life）からとられたものばかりである。田夫野人を好んで歌い、彼らの中にも人間としての尊さを見出すその態度は、英文学史上の時代を一つ先んじてはいるものの1で引用した*Adem Bede*の17章で展開されているGeorge Eliotの文学的態度にそっくりそのまま受けつがれていることがわかるであろう。

彼は22歳頃まで人間を自然の下に置いていたがフランス滞在中一王党の娘Annette Vallon

を恋して失恋してからは彼の最大感心事は人間となり, Man, the heart of man, and human lifeに思いを潜めるようになったのであった。これもGeorge Eliotの小説制作上の姿勢に大いに影響している要素であろう。

George Eliot自身も折りにふれ自分の思想とWordsworthとの類似を述べ, またそのことは, Wordsworthの詩とGeorge Eliotの小説とを読み比べることによって容易に指摘されうる事実でもある。革命的, 反抗的精神を特徴とするRomanticismの作家として, フランス革命時に自らパリで革命軍に共鳴したWordsworthの文学上のRadicalismは, しっかりとGeorge Eliotに継承され, 彼女の中でより深化したということができよう。もろもろのWordsworthの思想に特別強く共鳴して書かれた*Silas Marner*の中に表れるGeorge EliotのRadicalismは, 後の彼女の小説*Felix Holt the Radical*につながっていくのである。

しかし言うまでもなく, *Silas Marner*の中で重要なポイントはこのRadicalismだけではない。 *Silas Marner*の表題紙につけられたモットーとして,

'A child, more than all other gifts
That earth can offer to declining man,
Brings hope with it, and forward-looking thought! (11.156-8)

(子どもというものは, 大地が老いゆく人に与える何物にもまさり,
希望をもたらし, 将来に期待する思いをもたらすものなり。)

という, Wordsworthの*Michael*という詩の中の一部を記していることからわかるように, 彼女の全小説を通じてしばしば見られる子供礼賛を*Silas Marner*において集約していると考えられることのできるのである。

George Eliotが「編集者の中でもっとも寛大でもっとも好感がもてて, 自作の出版社として誰よりも先に選びたいと思」(『書簡集』第2巻, 348頁) っていたJohn Blackwoodが妻にあてた手紙の中で述べているように, '*Silas Marner* sprang from her childish recollection of a man with a stoop and expression of face that led her to think that he was an alien from his fellows.'⁽¹³⁾ (『サイラス・マーナー』は彼女が子供の頃みた, ねこ背で, 見るからになかまから疎外されたと思われるような表情をした男の人の記憶から生じた) 小説であった。それゆえ主人公のSilasはその男の再現となる。George Eliotは幼少期の思い出の中にあるその男の姿をオランダ画家がしたように, 一枚の絵として心のキャンパスに描き出し, その絵の中にある真実を文学の中で表現したのであった。そのあらすじを次に紹介しよう。

*Silas Marner*は故郷のLantern Yardでは敬虔なクリスチャンで職工をしながら教会の仕事にも精力的に取りくんでいた。しかし, 彼が軽いてんかん持ちであったことからそれをいいように使われて, 幼少の時から無二の親友とも思っていた友にあざむかれ, 教会のお金を盗んだという嫌疑をかけられて, いいなずけの間でもあった恋人にも去られ, 神への信仰はもちろん, 人間への信頼もなくしてふる里をさまよい出たのであった。そしてLantern Yardからかなり遠

くへだたったRaveloe村のStone-pit (石切り場) のcottageに住みつく。Silasが過去を断ち切るためにはRaveloeの村はもってこいのところであった。周りの風物もLantern Yardとは全く異なり、閉鎖的な村落共同体であるRaveloeの村は彼のその故郷を思い出させるものは何もなかったからである。誰も知る者もなく、神をも拒否し、社会とのコンタクトを全く持とうとしないSilasが命の支えにしたものは機織りの仕事であり、そしてそれを売ることによって手許に入ってくる金貨であった。金貨がふえてくればくるほどますます彼は織機にしがみつくようにして仕事をした。それは世話好きでお人好しで、humanityにあふれているが、閉鎖的なRaveloeの村の人たちから彼をますます孤立させていった。

人間性を喪失したSilasの、Raveloeでのそのような生活が15年も過ぎたある夕方、Raveloe村の有力な地主Cass家の次男で、手のつけられないような放蕩息子Dunstanが金策に窮して、Silasがちょっと用足しに出かけた折にSilasが自分の命とも思っている金貨のつまった袋を2袋とも盗んで姿をくらます。帰宅して金貨が盗まれたことを知ったSilasは半狂乱になって村中の人が集まる酒場Rainbowに助けを求めてかけつける。それは閉ざされ放しで一度も開かれたことのなかったSilasの心をRaveloeの村人達に向かわせる一つのきっかけになった。15年もの隠遁生活で完全に枯渇しきったSilasの人間性は容易によみがえるものではないが、執着するものを喪失し、他人の助けを求めざるをえない境遇におちいったSilasの心の中には、今までとは違って、命ある何か芽ばえ始めたことは否定できない。そしてその微々たる徴候を決定的にしたのが、大晦日の晩、stone-pitの近くでのたれ死にした女の腕からはい出して、Silasが失ったお金のことを考えながら戸口をあけ、ふっとまた起こったてんかんの発作のため失神していた間にSilasの小屋に入りこんだ二歳ほどの幼児であった。

Silasのてんかんはその時のそのままの姿勢で硬直が起きるたぐいのもので、その発作の間は皆目意識にないのである。発作が治まって戸を占めたSilasは、暖炉の前にかわかすために広げてあったSilasが外套用に用いていた袋の上でうずくまって眠っている幼児に気がつき驚く。Silasの弱った視力にはそれが金の山に見え、失ったお金がもどって来たのかと思う。しかしそれが幼女だとわかった時、Silasはまっ先に自分がかわいがってよく面倒をみた、幼くして死んだ妹の到来かと思う。それと共に、昔のわが家とLantern Yardの古い道すじとを思い出す。過去と現在とが彼の中でわずかにつながりかけたのである。

村の人達の心配にもかかわらず、Silasはその幼児を自分で育てていくことを決意する。Raveloe村きってのお人好しで世話好きのMrs. Winthropの助言や援助を受けながら。

金はSilasをますます仕事にかりたて、織機に向かわせたが、Eppieと名付けられたその子はcottageの外へ外へとSilasを誘った。SilasはEppieによって自然(nature)とも再び融合することができた。

Silasは子育ての大変さはあるにはあったが、かつて金貨を愛した以上にEppieを愛し、その子育ての苦労もほとんど気にしなかった。Eppieの父親になることは、EppieをRaveloeの住人として立派な娘に育てあげることであった。SilasはまずRaveloeの人達の宗教を受け入れる。そして村で行われているもろもろの宗教的な習慣に従うようになった。ふる里も知人も宗教も、過去

の一切から隔絶し、ただ金貨とだけ対話し、金貨のためにだけ生き、金貨とだけ心を通わせていたSilasの恐るべき不毛の世界は、どんどん活性化されていく。SilasとEppieの間には世界中のどの親子にも負けないほどの愛情があった。

しかしEppieはCass家の長男Godfreyが若い頃ちょっとした遊び心で結婚した酒場女Mollyとの間の子供であった。stone-pitの近くで死んだ女の検死に自ら志願して立ち合ったGodfreyは、Mollyの死も我が子がSilasの手に委ねられたことも知りながら、以前から恋していた、裕福な地主の娘でとても美しいNancy Lameterとの結婚を強く望んでいたために、見て見ぬふりをする。

Mollyが死に、自分とMollyとの結婚のことを知っている唯一の人、弟のDunstanも半年以上も行方がわからず、何の障害もなくなったGodfreyは首尾よくNancyと結婚する。ところが結局二人の間には子供ができない。寂しくてしかたのないGodfreyは再三NancyにEppieを自分の家の養女にしようと提案する。しかしNancyはそのつどかたくなに拒否する。

EppieがMrs Winthropの息子Aaronと結婚することが決まってしばらくしたある日、灌漑用の水が放出され、かつてなかったほどstone-pitの水が干た折に、その底に沈んでいたDunstanとSilasの盗まれたお金が16年ぶりに発見されるという事件が起こった。

幼いEppieがSilasを訪れる前にあれほどSilasを落胆させた彼の金貨盗難事件はDunstan Cassのしわざであったのだ。現場でしっかりそれを確認したGodfreyは、その恥ずかしい事実を妻Nancyに打ちあけた折、それまでひたかくしにしてきたEppieと自分との関係をNancyに告げる。事実を知ったNancyはやっとEppieを自分の家に引きとることに同意する。GodfreyとNancyはその夜すぐ、Silasのcottageを訪れその旨を告げる。

しかしSilasも当のEppieもその申し出を断固として断ってしまう。しょげかえっているGodfreyとNancyとは裏腹に、まもなく庭を持ちたいと願っていたEppieの思い通りgardnerであるAaronによってささやかだけれども美しい庭園がcottageに作られて、そこで始まるSilas, Eppie, Aaronの新しい生活に、三人は至上の幸せを感じるのであった。

大そう長いあらすじの紹介をしたが、以上のことからみても、かのモットーが、他の人が作った詩の一部でありながら、いかにこの*Silas Marner*の内容にマッチしたものであるかがわかるであろう。George Eliot自身も「それ(モットー)は物語を明白に示しすぎはしないでしょうか」と危惧していた⁽⁹⁾というが、そのモットーは一読してわかるようにWordsworthの子供讃歌であり、George Eliotが*Silas Marner*のモットーに用いたことの中には、*Silas Marner*が単に彼女の子供礼賛の小説にとどまらず、基本的にはWordsworthの児童観を踏襲してはいるが彼女独自の児童観を存分に展開した小説であることを暗示しているようにも感じられる。

*Silas Marner*のSilasとEppieとの関係は、同じVictoria朝の作家であるDickensの小説*A Tale of Two Cities*の中のDr Manetteと娘Lucieとの関係に酷似していることが指摘されているが、この論文ではその点においては紙面の都合上割愛し、モットーの元の詩であるWordsworthの*Michael*あるいは彼のその他の詩の中に見られる彼の児童観との比較において、*Silas Marner*のEppieを中心においてGeorge Eliotの児童観を究明していきたい。

3

フィリップ・アリエスは彼の名著『〈子供〉の誕生』⁽¹⁷⁾の中で「子供」というものの概念がどのように形成されてきたかを説いている。彼がその本の中で指摘したことは、「子供は長い歴史の流れの中で独自のモラル・個有の感情を持つ実在として見られたことはなく、〈子供〉の発見は近代の出来事であり、新しい家族の感情はそこから芽ばえた」ということである。「かつて子供は〈小さな大人〉として認知され」、「早ばやと〈若い大人〉になり労働も遊びもすべて大人たちと共有した」のであった。

18世紀のイギリスでは、商工業が発達し、富の増大、科学、特に医学の進歩による人口の増加、植民地の拡大が産業革命を起し国力を大いに発展させることになった。市民階級の経済力や発言権の増大は彼らに自分たちの子供を教育する目を開かせ、そしてそういった時代風潮を背景に哲学者や文学者の間で新たな〈子供〉の発見が行われたのである。

イギリスの哲学者John Locke (1632-1704)の哲学および教育論の影響を多分に受けたJean-Jacques Rousseauは自然回帰思想に基づく〈子供〉の発見の端緒を作ったフランスの哲学者である。

その後イギリスの作家Thomas Day (1748-89)は*Sandford and Marton*を書き、質素な農民の子Sandfordと富豪の息子でぜいたくに甘やかされきったMartonとを対比させ、富や階級による差別の無意味さ、虚飾のくだらなさ、自然回帰の必要を説いた。⁽¹⁸⁾

そのような自然回帰の思想や、またRousseauの自然を偉大な教師とする考え方はWilliam Wordsworthに受けつがれ、彼はそれを自らの文学的世界に深く取りこむことによって独自の自然観、人間観を打ちたてたのであった。

有名な彼の詩*My Heart Leaps up When I Behold*には彼の、自然に対するあるいは人間に対する考え方が簡潔にかつ明確に述べられていると思われるので次に引用する。

My heart leaps up when I behold

A rainbow in the sky :

So was it when my life began ;

So is it now, I am a man :

So be it when I shall grow old,

Or let me die!

The Child is father of the Man ;

And I could wish my days to be

Bound each to each by naturool piety.

(空にかかった虹を見ると私の心は踊ります。

私の人生が始まった時もそうでした。

大人になった今もそうです。

年老いたとてきつとそうでしょう。

そうでなかったら死んだ方がいい。

「子供」は「大人」の父なのです。

だから私のこれからの日々がぜひ

自然をうやまう心でつながれていってほしいものです。)

この詩の中心テーマは「子供」が「大人」の父だというこの特に有名な一文にあるであろう。すなわちnatural pietyに至上の価値を置いたWordsworthは、人間が年を経るに従って子供の時に周りに満ち満ちていたnatural piety（自然に対する畏敬の念）を失っていくものであるという人間観に基づいて、自然の神秘や美しさに感動する気持ちにおいては子供の方が大人よりもより先輩であって、そしてその子供の時に体験したnatural pietyはその人の一生を規定する大切な人間的要因であるという。

George Eliotが初めてWordsworthの詩を読んだのは彼女の20歳の誕生日であったが、その時の感想を彼女は次のように言っている。⁽²⁰⁾

I have never before met with so many of my feelings expressed just as I could wish them.⁽²¹⁾

(私は私の心の中に抱いているいろいろな感情の多くが、こんなに私の思いどおりに表現されているものに今まで出会ったことはありません)

彼女がもっとも痛切に感じたことは、Wordsworthの詩の中に、彼女がことのほか愛して自分との強いきずなを感じていた彼女のnative villageへの思いを見い出したことへの喜びであり、そしてまた、Wordsworthの、natural pietyが人間が生きる支えでもあり、究極の人生の目的でもあるとする自然観、人間観への共感であった。そしてそれから大分たって起こったLewisとの恋愛事件を通して深く深く愛していた自分のふる里を追われたばかりか、親兄弟、親叔知人の、自分の過去に結びつく一切から隔絶されなければならなくなり、Wordsworthのいう、幼少期を過ごした所の自然環境がどれほど人間の人生に大きな意義を持つものであるか、いかに現在のその人を規定しているかということがわかるに及んでWordsworthへの思想への傾倒がますます進んだのではないであろうか。

George Eliotの人間観、児童観を理解するためには、特にWordsworthの*Michael*の一部をモットーとして用いている*Silas Marner*においてそれを究明するためには、Wordsworthの人間観、児童観をもう少し知らなければならない。そのためには彼の長大な詩*Ode*をみるのが一番適策であろう。⁽²²⁾

この詩の中でWordsworthは子供に対する憧憬をせつせつと述べ、年ふると共に幼児の時に自分の周りにあふれていたcelestial light（こうごうしい天の光）が見えなくなっていくさまを嘆いている。すなわち人間は、

Heaven lies about us in our infancy!
Shades of the prison-house begin to close
 Upon the growing boy,
But he beholds the light, and whence it flows
 He sees it in his joy ;
The Youth, who daily farther from the east
 Must travel, still is nature's priest,
 And by the vision sprendid
 Is on his way attended ;
At length the man perceives it die away,
And fade into the light of common day. (11.66—76)

(幼児期には天はまさに身のまわりにあるのだ！
育ちゆく少年に牢獄の影がとざし始める。
しかし彼はかの光を見、その源を見る。
彼はそれを喜びの中にながめる、
日毎に東から旅をしなくてはならない「青年」は、
それでもまだ自然の司祭であり、
道すがら美しい幻影に伴われる。
ついに大人になればその光も消え失せて、
日常の光の中にとけこんでいってしまうのだ。)

という経過をたどるのであって、人間の誕生というのは、Wordsworthによれば前世に於て活躍した霊が眠りにつくものであるという。それゆえ人間の自然の神秘と霊交する能力は幼少であればあるほど強いのである。Odeの中でこのあとさらにWordsworthは

Behold the child among his new-born blisses,
A six years' darling of pigmy size!
See, where 'mid work of his own hand he lies,
See, at his feet, some little plan or chart,
Some fragment from his dream of human life,
Shaped by himself with newly-learnèd art ; (11.85—92)

(見よ、新生の至福にかこまれた
背丈が小人ほどの六歳のいとし子を！
見よ、自らの手作りの物の中に身を横たえるさまを。
.....
見よ、子供の足下にあるささやかな計画や海図を。)

それらは彼のこれからの人生の夢の断片で、
新しくおぼえた技術で自ら作ったものなのだ。)

と述べ、自分というものをいかようにも形成していくことができる可能性を持った存在として
幼児をとらえ、さらにその可能性の中にこめられた、神の御業に似た創造性を幼児に見い出し
ている。また子供は

Haunted for ever by the eternal mind— (1. 113)

(常に永遠の魂の訪れを受け)

るものであり、

On whom those truths do rest,

Which we are toiling all lives to find, (11.115-6)

(我々が全生涯を通じてあくせくと探し求める
真実は君の頭上にあるのだ)

と言って、子供の中にある神性を強調する。ところがその子供の持つ神性は、

Full soon thy soul shall have her earthly freight,

And custom lie upon thee with a weight,

Heavy as frost and deep almost as life! (11.126-8)

(あまりにも早くおまえの魂は浮世の重荷を背負い、
因しゅうは霜のように重く、生命のように根深く
おまえを圧するようになるであろう)

と述べ、我々人間の人生に課せられた重荷や社会生活を営むことの中にある因しゅうなどによ
って徐々にうすらいでいくものであることを嘆き、その失われゆく神性を愛惜する気持ちは限
りなく強い。Wordsworthにとって、子供の身の周りに常にあるcelestial lightやeternal mind
は自分の生きる目的であり、絶対的真実であったのだ。The Child is father of the Man.の具
体的な意味はまさにそこにあるのである。

4

このようなWordsworthの児童観は、子供が大人の未完成品であるという18世紀的な視点を
を180度かえたものであった。しかしそのような、子供を人間の本質としてとらえようとする視
点は、Dickensが*Oliver Twist*の中で言っているように、孤児Oliverがどろぼうの手下になって

しのびこみそれに気付いた召使いに鉄砲で撃たれた折、手当てを受けたMrs Maylieの養女Roseの言葉にみられる、子供というものが母親の愛情に満たされ、家庭内の慰安の中で大切に育てられなければならないというVictoria朝の児童観とは大分異なったものと言えよう。

²⁴⁾
*My Heart Leaps up When I Behold*や*Ode*にみられるWordsworthの児童観は、子供というものは、我々が生きる目的である大きな真理、すなわち神を包括するものであり、特別にかよわき者、やさしい愛情で守られるべきものと考えられるのではなく、独特の力強い生命力にあふれた、一個の偉大な存在なのであった。したがって彼の子供礼賛は、大人になるにつれ失っていくcelestialな部分を子供が多く持ち合わせていることに対する一種の羨望がその底流に存在する。

Romanticismの代表的な詩人として自然と人間とのかかわりの深さを数多くの叙情詩に書き表してきたWordsworthであったが、実際の家庭内における「子ども」の姿を叙事詩的に、物語風に書いたものがただ一つある。それが1の部分で引用した、George Eliotが*Silas Marner*の表題詩につけるモットーとしてその一部を用いた*Michael*であった。*Michael*の最初のstanzaでWordsworthはこのお話が人間について、人間の心について、そして人間の生活について(on man, the heart of man, and human life) 深く自分に考えさせたことを述べている。

*Michael*の主人公Michaelは険しい山合いの谷間でわずかばかりの土地を耕す、羊飼いや兼農夫であった。Michaelのそこでの暮らしはもちろんMarnerのStone-Pitでの暮らしと同様にHumble lifeである。しかしMichaelにはMarnerとは違って20歳以上も年の若い妻がいた。そしてMichaelが“墓場に片足つまこんだ (With one foot in the grave [1. 90])”頃、息子Lukeが生まれる。

to Michael's heart

This son of his old age was yet more dear—
Less from instinctive tenderness, the same
Fond spirit that blindly works in the blood of all— (11.42–45)

(マイケルの心にはこの年老いてから生まれた子供が
〔妻にも〕いやましていとしく思われた—
本能的な愛情からというよりも、ことにむやみに
血の中にわき起こる深い情愛からであった—)

MichaelのLukeへの愛情は本能的なものではなく、もっと別のある大きな力にその源を発していたのだ。それは「親と子」という関係を越えたところの、老いゆく者が若き命を渴望しそして愛でる人間の本源的な愛情であったのかもしれない。そうであればまさにそれは*Silas Marner*でSilasがEppieに向けたものと一致する。Wordsworthがここで書いたことは、概して人間は、老いゆく者は特にそうであるが、若い命を身の周りに求めるものであり、子供はその渴望をいやす存在で血縁を軸とする家族の概念の枠外にあるということである。Wordsworth

は特に家族という概念の中で子供をとらえることはない。その考え方はSilasとEppieが立派な親子になったことからわかるように、George Eliotにも共通して言えることであるが、George Eliotの場合、親子の関係はWordsworthよりもう少し範囲が狭められて、後の章で詳しく述べるその者が生活している地域共同体にある“the unwritten code”（書かれざる規範）の中でとらえようとする。

Michaelはこのあと例の*Silas Marner*のモットーの子供礼賛のlinesが続き、そして

Old Michael, while he was a babe in arms,
Had done him female service, not alone
For pastime and delight, as is the use
Of fathers, but with patient mind enforced
To acts of tenderness; and he had rocked
His cradle as with a woman's gentle hand. (11.153-8)

(老マイケルは我が子が抱くことしかできない。
赤ん坊の時、気晴らしとか単なる喜びとか
父親たる者の常に見られる気持ちからばかりではなく、
愛することの行為そのものに強いられるしんぼう強い心をもって
母親がするのと同じようなことを赤ん坊のためにした。そして
母親が手でゆりかごをやさしくゆするように、彼は
赤ん坊が寝ているゆりかごをそっとゆすった。)

のである。ここでもWordsworthは、Michaelの幼い我子Lukeへの愛情が本能的な父と子以上のものであったことを指摘する。それは‘墓場に片足つつこんでいる’ほどの高齢に達したMichaelのその年齢がMichaelをそのような思いにかりたてているのであろうが、父親、母親を越えたところにある愛のエッセンスの成せるわざであったのだ。*Silas Marner*の中でSilasが一番最初に自分の家の暖炉の前に幼児を見つけた時、まっ先にその昔自分がとてもかわいがっていた妹を思い出すが、SilasのEppieへの愛情も兄と妹との間にある強い愛情に源を発した親子の愛情であって、George EliotもWordsworthと同様に人が何かを愛する心はすべて一つのところに源を求めている。それが「神」なのであろうか。

Lukeは10歳ほどにもなると勇敢な少年になり、仕事の上でMichaelのこの上もないよきcompanionになっていく。

from the boy there came
Feelings and emanations—things which were
Light to the sun and music to the wind ;
And that the old man's heart seemed born again. (11.200-203)

(少年からいろいろな感情が生まれ、そしてまた少年から何か発せられるものがあった。それらは太陽に向かう光であり、風への音楽であった。それによって老人の心は再び生き返ったような感じだった)

Wordsworthの意識の中の子供礼賛の思いは、先のGeorge Eliotが*Silas Marner*のモットーとして使った部分にみられる、子供すなわち希望と将来への期待という考え方よりも、上に引用した11. 200-203の部分に表れている、子供の中にある「年老いた人を生き返らせる力」の方により重きが置かれているように思われる。

人間の本源的喜びも、人間としての真の生活も、自然の中にこそ求められるべきものであり、年と共に薄れゆく自然への思いをよみがえらせるのが子供であった。George Eliotもまた子供の持つこのような力にも真価を認めていて、*Silas Marner*の中で幼いEppieが枯渴したSilasの自然への目を開かせ、それが彼の人間性を蘇生させた大きな要因であるとしている。

これらの引用文からもわかるようにWordsworthは子供に対して2つの視点を持っていたことがわかるであろう。すなわち神性を持ったものとしての視点とそしてまたhumanismからの視点とである。そしてWordsworth自身は子供の神性をより強調する。しかしGeorge Eliotは*Silas Marner*のモットーとして11.146-8を用いていることからわかるように、子供の神性は十分に認めてはいるもののhumanismの視点から子供をみる。その点でGeorge Eliotの児童観はWordsworthとoverlapするところは大きいにもかかわらず興味のある独自な見解となるのである。

*Michael*のstoryのその後の展開の中にはWordsworthの児童観が述べられている部分は極めて少なくなっているがそのかわりにWordsworthの人間観が具体的に表現された貴重な資料と思われるため、George Eliotの*Silas Marner*を理解する一助として次に紹介しておく。

Lukeは父の愛ある視線に見守られてすくすくと育ち18歳になってなお年老いた父の慰め(comfort)であり日々の希望(daily hope)であった。しかしその幸せも長くは続かなかった。Michaelは工業界で手広く活動していた甥の保証人になっていて、ある日突然その甥の負債を弁済するよう命ぜられたのだ。Michaelは先祖伝来の畑を売るより他に道はないと思うが、もしそれをなくしてしまったら、自分達の生活はもとより、Lukeの将来の安寧もころもとなくなってしまうのに気付く。それで妻Isabelと相談の結果、はぶりよく商業を営んでいる他の親叔の男の下にLukeをやり、その負債の弁済額をLukeの手で稼ぎ出してもらうことにする。Lukeは喜んで行くことを承知したが、そうはいえ、MichaelとIsabelは愛する息子との別れが身を切られるようにつらい。Lukeの出発を明日に控えた日、Michaelは深い谷間の小川のそばにLukeを誘った。Michaelは以前からそこに、小川の岸辺から運んだ石で羊の囲いを作ることを計画していたのだ。

ここでMichaelはLukeが自分にとってこれまでいかに大切な存在であったか、またこれからもずっとそうであるかということ話す。

Wordsworthの子供礼賛がどのようなものであったか、George Eliotとどのような点で異なっているかはすでに述べたが、さらにそれを補足する意味で二、三次に引用しておく。

thou art the same

That wert a promise to me ere thy birth,
And all thy life hast been my daily joy. (11.335-5)

(おまえは生まれる前から私の大きな期待であり、
生まれてからはずっと毎日の喜びの泉であったが、
その気持ちは今もちっとも変わってはいない。)

Never to living ear came sweeter sounds
Than when I heard thee by our own fireside
First uttering, without words, a natural tune; (11.345-7)

(炉端でおまえが初めて言葉のない自然の歌を
歌った時ほど甘美な音を人間はそれまで誰も
きいたことはなかったであろう。)

MichaelのLukeへの深い深い愛は、Michael自身が子供の時に周りの人々から受けた愛に対する恩返しの意味もあった。

MichaelはLukeに、自分の先祖代々がそこで生活しその地で死んでいったのであり、Lukeもまた必ずや再びこの地にもどってきて自分も含めた先祖たちと同様の人生を送ってもらいたいと話す。そして先祖から譲り受け、さらに自分が一生懸命に耕してきたその畑がとうてい人手に渡せない大切なものであることを話し、土地を手渡すかわりにLukeを旅立たせることになったことを詫げる。そしてこれからのLukeの人生に待ちうけているかもしれない悪の誘惑にLukeが陥ることのないよう、先祖たちの正しい生き方を常に心に思い出すよう、また父親であるMichael自身との愛のきずなを思いだすよう、羊のその囲いのcorner-stone (基石) を置くことをLukeに頼む。そしてLukeが帰って来るまでMichael一人の手でその囲いを完成させておくことを約束する。

町に出たLukeは最初のうちはすばらしい働きぶりをして両親をこの上なく喜ばせたのであったが、とうとう身を持ちくずし、あげくのはては外国へ逃亡してしまう。しかし、

There is a comfort in the strength of love ;
'T will make a thing endurable, which else,
Would overset the brain, or break the heart : (11.448-50)

(愛が持つ力には一種の慰めがある。
頭を動転させ、悲嘆に暮れさせるようなことでも、

それは堪えしのぶことができるようにさせるのだ。)

すなわちLukeはMichaelにとって先祖代々の自己の命を含む、生活に付随した他のもろもろのものを未来に引き継ぐ存在なのであり、したがってMichaelのLukeへの愛は永遠不変のものであったのである。人間にとって世代の流れが途絶えることなく果てしなく続くということは何と喜ばしいことであろうか。それはその昔、罪を犯した人間の祖先が死すべき罰を与えられた折りに、神が恵まれた人間への唯一の愛の証だったのである。Silas Marnerで金貨をなくしたSilasがその直後手許にやって来たEppieに対して金貨などとは比べられない深い愛情を抱くようになったのはここに原因があったのである。

MichaelはこのLukeの心ふさぐ知らせの後にも信じられないほど精力的に働き7年間もの間、折にふれLukeとの約束の羊の囲いを作る仕事に精進したが、とうとうそれを完成させないまま彼は死んでしまう。Isabelもその後しばらくして死に、彼らの土地は全部売り払われた。Evening Starとよばれたその家も取りこわされ、戸口のかたわらのかしの木と、未完成の羊の囲いだけがMichaelとIsabel夫婦の思い出の品となっているのである。結局Michaelが土地を手放す代わりにLukeを手放したその選択は誤っていたことになった。Michaelは先祖代々の土地もLukeも両方とも失ってしまったのであるから。たとえLukeとの愛は消えることはないとしても。

5

Lukeを破滅させたのは一体何であったのであろうか。それはLukeがそれまで住んでいた小川のせせらぎがきこえる谷間の家とはまるきり違う都市での生活であった。

原初において神は人間の本来的な生き方として農耕・牧畜を与えたのであって、都市＝商業＝金＝非人間的なものという構図は、人類初の殺人者であるCainの末裔が都市で裕福になり創造主のことを忘れたように、悪を知った人間の向かいがちな破滅的側面なのであった。ことに、山奥のあちらこちらから小川のせせらぎがきこえる、けわしいけれども緑豊かな谷間で、Wordsworthの観念からすれば神と等しい自然の懷に抱かれて生まれ育ったLukeにとって、都市の生活はあまりに誘惑が多過ぎて、即ち神の言葉ともとれるMichaelの心からの忠告も、また即ち神であるふる里のGrasmare Valeも、また父親との契約の印(covenant)であるsheepfoldのことも、そして谷間の家のhuman lifeの一切を忘れ去らせる力を持っていたのであった。

Wordsworthのこの考え方もGeorge Eliotと共通するところで、Silas Marnerの中ではそれが逆の形で表れる。すなわちSilasの生まれ育ったLantern Yardは、後にEppieを連れてSilasが訪れた時の描写からもわかるように、Raveloeなどに比べればものの比ではないほどの都会である。その中において金銭的トラブルによりMarnerは人間を、そして神をも信じることができなくなる。そして直接的にはEppieによってではあったけれども、Marnerが再び人間性を回復したのはRaveloeという旧式の村の中でのことであった。

Silas Marnerの6章には、Raveloe村の唯一の居酒屋Rainbowでの村人達の遠々と続く会話が事細かく記されている。会話の内容はbutcher(屠殺屋)がその前の日に引いてきた牛のこと、

後にGodfreyの妻になるNancyの生家である、地主Lammeter家のRaveloe村での歴史、それから村人達相互のかかわり、それぞれの村人の職業や性格、才能等々について、また人の噂話や迷信に至るまでの多岐にわたっている。storyとは直接関係のないこのような村人達のいつ果てるともしれない会話を、まるまる一章(それも他の章よりもずっと長い章)費やしているのは、George Eliotがあえて意図した行為であるとみなされざるをえない。

ここには村人達の心情や、村人達の生活がなまなましく息づいている。Q. D. Leavis女史はこれを村の生活のthe unwritten code (書かれざる掟)⁽²⁸⁾ であるとし、そしてThe cheerfulness of the cottager rests largely upon a survival of the outlook and habits of a peasant days.⁽²⁹⁾ (村人の人の好きは主に農民だった先祖たちの物の視方や習慣のなごりである)という。さらにイギリスの古い村においては、In the little cottages the people, from earliest infancy, were accustomed to hear all things—persons and manners, houses and gardens, and the day's work—appraised by an ancient standard of the countryside.⁽³⁰⁾ (小さなそまつな家の中で人々は、幼い子供の頃から、その地方の古くからある規範を通してみられたもろもろの事から一人々のことや習慣、家や庭、そしてまた日々の仕事—を聞いて育つのがならわしだった)のである。したがってThe people stood for something more than merely themselves.⁽³¹⁾ (各々の村人たちは、単なる自己自身を越えたそれ以上のものを表象する存在でもあった)ことを述べている。

George Eliotはこの6章でRaveloe村のこういったthe unwritten codeを描こうとしたのであった。そしてこれがMrs WinthropやMr Macyに代表されるRaveloe村の人々のcheerfulnessの源であったのであり、そのRaveloe村特有のthe unwritten codeの中でこそ、Marnerは人間として再び蘇生することができたのであった。一見ながながとした村人たちのおしゃべりがつづいていくつな6章であるがhumanismに強い関心を持っていたGeorge Eliotはhumanismの源としてこういったcodeをみなしていたのであって、人間の精神面での救済をテーマとする*Silas Marner*にはこの6章はRaveloe村のthe unwritten codeを紹介する意味でも必要不可欠の大切な章だったのである。

Lukeは故郷を離れ都市に移るとまもなく身を滅ぼしたのであったが、Wordsworthにとって、George Eliotが至上の価値を置くこのthe unwritten codeと同等の価値を持つものが“自然”の懐であった。したがってWordsworthが人間をあくまで自然との関係の中でとらえるのに対して、George Eliotはより社会性を持った規範の中で人間をとらえようとする。そしてGeorge EliotにはさらにIndustrial Revolutionによってそういった固有な“村”の存在がイギリスの農村から消えてしまったことへの深い悲しみと憤りが交錯しているのを感じる。これがWordsworthよりもよりRadicalであるといわれる原因なのであろう。

6

Joan BennetがGeorge Eliotの小説に共通した構造を、内部集団(道徳的ジレンマに陥った少数の人々の集団)とそれを取りまく外界(そのジレンマがそこで解決されるべき社会)として総括していることは紀要11号の“*Adam Bede*にみるGeorge Eliotの女性観について”の中で

すでに述べた。Adam Bedeの場合その内部集団、すなわちinner circleと外界、すなわちouter circleとがきわめて明確であったが、Walter AllenがSilas Marner is a novel of redemption: but the redemption is not Marner's alone, for the novel has a double action, Marner's and young squire Godfrey Cass(『サイラス・マーナー』)は救済の小説であるが、しかしその救済はマーナーだけのものではない。この小説には2重の筋運びがあるからである。すなわちマーナーの筋と、若き地主ゴッドフリー・カスの筋運びである。)と述べていることからわかるようにSilas Marnerではouter circleを構成するRaveloeの村や村人たちの中で、inner circleとしてMarnerを核とするものとGodfreyを核とするものとの2重構造が考えられ、かなり複雑である。そしてそれら2つのinner circleはあたかも何の関連もないかの如く1つのstoryの中で並行して進行する。

しかし、大晦日の晩に雪の中で死んだ酒場女Mollyの腕の中からはい出した、後にEppieと名付けられた少女が登場するや、その二つのinner circleは急速に歩み寄り、最後は完全に融合して一つのinner circleとなるのである。Silasを核とするinner circleはお金の世界であり、もう一つのinner circleの核であるGodfreyのその当時のmoral dilemmaは、自分の誤った結婚に対する後悔と、誰もが期待している美しい地主の娘Nancy Lameterとの結婚願望のはざまでの文字通りの苦しいmoral dilemmaである。

Godfrey Cassのそのmoral dilemmaは、“誤った結婚”への後悔の原因となっていたMollyの死によってすべてが解消したかにみえた。Godfreyは何の良心の呵責もなく、彼が切望しているNancyとの結婚にむかって邁進することが可能となったからである。Nancyとて、彼がそれまでの優柔不断な態度を捨て誠心誠意結婚を申しこめば受け入れてくれる可能性は十分あった。前途洋々たるGodfreyには、自分とMollyの間の子供がMarnerに引きとられていることについて新たなmoral dilemmaを感じる余地はなかった。しかし、願いがかなって結婚したNancyとの間に子供ができなかったことから、過去のmoral dilemmaがGodfreyの意識に再び浮上する。

一方、金貨盗難により、それまで物心両面にわたってしっかりと我身をおおっていた堅牢な金の鎧をはぎとられたMarnerは、途方に暮れてRaveloeの村人に近づいていく。村人たちはそれまでずっと疎遠にしていたMarnerではあったが、打ちひしがれたMarnerを暖かく迎え入れたのは言うまでもない。しかし15年間もの人間社会からの隔絶は、MarnerをRaveloeの村にそう簡単には溶けこませない。Marnerが非人間的な金貨の世界から完全に救われるためには、もっともhumanな社会集団であるRaveloeの村に同化することが必要であった。

金貨盗難という事件でその突破口が開かれたSilasの心を、Raveloeの村と村人たちにより積極的に向かわせたのがEppieである。老Michaelが言っていたように、幼児を愛するという行為は、自分が幼い時に受けた両親や周りの人たちの愛に報いる行為なのであった。

自分のcottageの暖炉の前で眠っているかわいい少女の姿は、Silasにいまわしい思い出の中に沈んでいる、それまでは忘れることのみに努めてきた遠い過去のことを知らず知らずのうちに思い出させた。まず自分が子供の頃よく面倒をみた幼くして死んだ妹のことである。それから自分の生まれ故郷であるLantern Yardの古い道すじも。ここでEppieは、他の物ではそれを

することは絶対に不可能であろうSilasの意識の中の過去と現在とを結ぶパイプ役を果たしているのである。

この論文の2の部分で見てきたようにWordsworthにとって人というものは過去あつての現在であり、過去、ことに自分の子供の頃の思い出、あるいは自分が生い育った故郷は、その人の現在を規定するかけがえのないものであった。この点についてはGeorge Eliotも同様の考え方をしている、Silasが自分の子供の頃のこと、妹のこと、そしてさらにいまわしい思い出の焼きついたもっとも思い出したくないLantern Yardのことを思い出したということは、Silasの心の中に、その幼児を見た一瞬のうちに、かなり力強くSilasを人間として蘇生させる命の萌芽があったことが察せられよう。

Silasの故郷はLantern Yardという町であり、George Eliotが大そう愛情を持っていた典型的なイギリスの農村ではなかったけれども、Silasにとっては、そこはやっぱり切ってもきれない大切なふる里であったのである。

Eppieによって現在と過去が結ばれ始めたSilasは、Eppieを養女にすることによりRaveloeの宗教にも立ち入らざるをえなくなり、そしてさらには積極的にそれを受け入れるようになる。Lantern Yardで、神載によって自分かけられた教会の金の盗難事件の罪が確定した時点で、人間への信頼はもとより神への信頼をもなくしたSilasであったが、Eppieへの愛情が、Silasにそこに居を構えている以上、Eppieの幸せはその村に溶けこむことより他にはないと考えさせたのと同時に、いまわしい思い出のつまった過去を雄々しくのり越える力をSilasに与えたのであった。言いかえればMrs Wintropのいう、すべての悪や災難や病気などを越えたところになおかつ必ず存在している良きもの、すなわち神の存在を、SilasはEppieによって再び確認したのであった。神は物質的なものの中ではなく、人間的な愛情の中にこそ見いだされるものなのである。

さらにEppieへの愛情はSilasの未来への希望と結びつくものであった。George Eliotの意識の中におけるもっとも人間的な人生の条件の一つに、過去、現在、未来と一貫した生き方をすること、そして未来は希望をもって迎えられなければならないということがあった。一人の人間にとって、ひいてはまた人類にとって未来の希望は子供によって与えられるべきものなのである。

MarnerはこのようにしてEppieにより急速に人間性を回復していくが、Eppieはさらにもう一つSilasの心の救済に力強い手をさしのべていたことがあった。それはWordsworthも力説する、年老いた人の薄らいだ自然への感覚をも目ざませる子供のみずみずしい生命力である。Eppieは、

re-awakening his senses with her fresh life, even to the old winter-flies that came crawling forth in the early spring sunshine, and warming him into joy because she had joy. (Chap.14)

(そのみずみずしい生命力で、早春の日ざしの中にはい出してくる冬を生きながらえた蠅にさえ感動を覚えさせ、ただ彼女が喜んでいるそのことのために彼は心をなごませ喜ばしく思うの

だった。)

SilasはEppieと連れ立ってお気に入りの堤によく出かけていった。

sitting on the banks..., Silas began to look for the once familiar herbs again; and as the leaves, with their unchanged outline and markings, lay on his palm, there was a sense of crowding remembrances...

As the child's mind was growing into knowledge, his mind was growing into memory : as her life unfolded, his soul, long stupefied in a cold narrow prison, was unfolding too, and trembling gradually into full consciousness. (Chap.14)

(堤の上にすわって、サイラスは以前親しんだ薬草を再び探し始めた。葉が以前と全く変わらない輪郭やもようをつけたまま手の平に置かれるといろいろな思い出がどっとわいてくるような気がした…

子供の心が知恵づいてくるにつれ、彼の心にますます思い出がよみがえってきた。彼女の命が花開いていくにつれ、冷たく狭い牢獄に長い間つながれて麻痺した彼の心もまた少しずつ開かれていき、そしてだんだんと全き意識に向かって揺れ動いていくのであった。)

人間の霊が大自然の中にある生命体と原初のところで融合しているという意識はWordsworthに強くある考え方であるが、George Eliotの場合も同じであって、人間はその自然との一体感の中において生きる喜びと至福を得るのである。特に精神的な拘禁生活のために自然の至福からも長い間隔離されていたSilasにそれを悟らせたのが唯一Eppieの力であった。George Eliotにとって子供は自然と強い一体感を持っているばかりか、大人にとって自らの過去とも強いつながりを持った存在なのである。

SilasはEppieによって自然の至福が得られるようになり、人間として生きる本当の喜びを得、さらにまた、現在の自分がよって立つところの、現在をそして未来を生きる上に何よりも大切な自らの過去を取りもどしたのであった。

このようにGeorge Eliotにとって子供とはWordsworthよりももっともっとhumanなものであって、human heart, human lifeに強い力で作用する存在なのである。そして子供への愛は、子供が神と通じているきわめて神秘的な存在である以上、神への愛と同等な重みを持つ。例えばSilasは最初にEppieをみた時、old quiverings of tenderness—old impressions of awe at presentiment of some Power presiding over his life (Chap.12) (かつて感じたことのある愛のおののき—彼の生活を統轄しているある「力」の予感への畏敬という以前の印象)を感じたのであった。

Wordsworthが、神、自然、人間の生そして死のサイクルの中で子供をとらえるのに対して、George Eliotはhuman lifeに及ぼす神の力の中に子供を置く。すなわち、上の例のように、神を捨て完全に神から隔絶していたSilasにEppieが神の存在を再認識させたように、George

Eliotの場合、子供の中の神性が神への透視力となってhuman heartに迫るのである。それはまたGodfreyがSilasの家の近くで死んだ女(かつての自分の妻Molly)を見に行った際、Silasの膝の上でMollyとの間の秘密の娘であるその幼女が、じっとGodfreyを見上げた時のGodfreyの印象の中にもはっきりと表れる。すなわちGodfreyは次のような思いを抱く。

That wide gazing calm which makes us older human beings, with our inward turmoil, feel a certain awe in the presence of a child, such as we feel before some quiet majesty or beauty in the earth or sky—before a steady glowing planet, or a full-flowered eglantine, or the bending trees over a silent pathway. (Chap.13)

(そのぼつちりと見開かれた目の凝視は、乱れた心を抱いている大人の我々にその幼児に面と向かった時に一種の畏怖の念を感じさせるものである。それは天地の中にある静寂の荘厳さや美しさの前で—すなわち、絶えずきらきらと輝く夜空の星や、満開の野バラやしんと静まり返った小径に枝をたれた木々の前に立った時に我々が感じる思いと同じたぐいのものであった。)

Marnerのような男がまだよちよちとしか歩けないような子供を引きとることなどとうてい不可能だと誰もが思ったことであろうに、彼が何のためらいもなくその子を自分の手で育てていくことを決意したのは、その子がsomehow a message come to him from that far-off life (Chap.12) (彼のずっとずっと昔の生活から彼のもとにつかわされた使いのようなもの)であると彼が一瞬感じたと同時に、その幼児の中に上に述べたような“神”の存在を彼が見出したからでもあった。そのため、それからしばらくしてMarnerは、Mrs Winthropの助けを得てEppieを初めてお湯に入れ洋服を着せようと抱き上げたとき、trembling with an emotion mysterious to himself, at something unknown dawning on his life (Chap.14) (彼の生活にあげぼのを到来させた未知のあるものへの、自分にも不思議な感情にふるえていた)のである。

George EliotはそのSilasとEppieとの関係を、悪徳が故に神によって破滅させられたソドムの街から正しい心を持った人々を天使が救い出した聖書の中のお話⁽⁸⁴⁾を例としてあげて示している。

7

Eppieの成長と共にMarnerが将来に約束された至上の幸せへの道を着々と歩んでいた頃、*Silas Marner*のもう一つのinner circleの核であるGodfreyは次第に寂しさを募らせる生活を送っていた。Mollyの死により急に開けた自分の前途に、Nancy would smile on him as he played with the children (ナンシーが子供たちと遊んでいる彼の方を見てほほえんでいる)情景を思い浮かべ、そこを神から与えられた「約束の地」ほどにも思っていたGodfreyであったが、思い通りにNancyと結婚してまもなく生まれた子供は生後すぐ⁽⁸⁵⁾に死に、それ以来二人には子供がでなかつたのであった。

NancyにはGodfreyが心に描いていた結婚前のその幸せの構図が無残にもこわれた現実

年と共に寂しさを募らせていく気持ちが痛いほどよくわかる。Nancyは姉PriscillaのGodfreyへの揶揄に対して

It's natural he should be dissatisfied at not having any children : every man likes to have somebody to work for and lay by for, and he always counted so on making a fuss with 'em when they were little. (Chap.17)

(彼が子供が一人もいないことでがっかりしているのはあたりまえよ。男の人は誰も働いたりたくわえたりする励みになる人を誰か持ちたいものなんですもの。それに彼は、子供達が小さい時子供たちのことでやきもきすることをいつも思いめぐらしていたものよ。)

George Eliotの心の中では一組の男女が結婚した場合子供が生まれるのは当然のこととされ、またGodfreyがNancyとの結婚の前に幸せの構図として、もちろんその中心にはNancyがいるのであるが、何人かの子供たちに取り囲まれた自分の姿を思い描いていたように、愛し合う男女の幸せは健康な子供の誕生なしには完成されない。

GodfreyがNancyに対しては変わらぬ愛情を持ち、また二人の生活に限っては何の不服もなかったのに、我が子を持つことが絶望視されるにつれ生活の中に強い虚無感を感じるようになったのはGeorge Eliotのこのような考え方からであった。しかしここで注目すべきことは、Nancyが

'... a woman can always be satisfied with devoting herself to her husband, but a man wants something that will make him look forward more—and sitting by the fire is so much duller to him than to a woman!' (Chap.17)

(女は夫に献身的に尽くすことによっていつだって満足することができるわ。でも男の人は将来に楽しみをもたらすようなものを求めるのよ。—そして炉火のそばにただ座っているのは女の人よりもはるかに堪えがたいものなんだわ。)

と言っていることである。つまりNancyはGodfreyほど自分たちに子供がないことを寂しく思っていない。

紀要11号の筆者の論文の中でも述べたように自分の生んだ嬰兒を森に捨てて死に至らせたHetty Sorrelの死刑を、その刑執行のまぎわに流刑に軽減したのは、Hettyの中に芽ばえた母性へのGeorge Eliotの畏敬の念であった。その母性への畏敬は*Silas Marner*においてもしばしば見られるGeorge Eliotの思想の特徴である。特筆すべき例を次にあげる。

Yet sweet Nancy might have been expected to feel still more keenly the denial of a blessing to which she had looked forward with all the varied expectations and preparations, solemn and prettily trivial, which fill the mind of a loving woman when she expects to become a

mother (Chap.17)

(しかしやさしいナンシーは愛情深い婦人が母になることが約束されたとき、心を満たすおごりかな、しかもささやかな、もろもろのあらゆる期待や準備をしながら、楽しみに待つという祝福が自分には与えられなかったことをなお一そう切なく感じていたのかもしれない。)

*Adam Bede*の中でBartle Masseyが女性に対してただ一つ脱帽していたことが女性のその子供を生む能力であったように、それは女性だけに与えられた特権であり、神から与えられた blessingなのであった。そして子を持つ喜びは女性にとってそのblessingに浴することにある。しかし子供をいつくしみ育てるといことは母性によるものではない。子供の成長にとって母親の愛が大変重要な役割を持つことはGeorge Eliotも認めてはいるが、強いていえばむしろそれは、父親の側へのblessingということになろうか。それゆえ、Silasは十分一人でEppieを育てあげることができたのである。

すなわちGeorge Eliotは子供を二つの側面からとらえる。女性の母性に結びつく神からの blessingとしての子どもと、未来に希望をもたらす、父親へのblessingとしての子どもとである。それゆえ、当然上のNancyの感慨の中にもあるように父親と母親とでは我子に対して異なった意味合いを持つようになる。そしてさらには子どもというものは母性、父性を越えた人間の、あるいは人類の希望の光として君臨することにもなろう。

紀要11号の筆者の論文の中に引用してある*Adam Bede*の中の、Artherの言葉、「それからいいですか、ポイザーの奥さん、子供たちはみんな連れてきてくださいよ。坊やたちはもちろん、あのおちびさんのトティーちゃんもね。僕はうちの土地に住んでいる子どもたちみんなに来てほしいんだ。一僕が禿げた年よりになった時に立派な若者や婦人になるであろう子どもたちみんなですよ」からもわかるように、George Eliotからすれば、子供は、もちろん夫婦にとってかけがえのない希望の光ではあったが、それは人間一般に普遍的にある、自分たちの世代を受け継ぐべき後継者を持ちたいという願望、すなわち人類の繁栄を約束すべき存在の希求に応える大いなる存在だったのであった。

そのような観点から両親はもとより大人は子供をいつくしむ。家族という概念も、もちろんGeorge Eliotの思いの中にはあったけれども、現在のように、両親とその子どもの間にある血縁が強く意識された家族の概念はなく、親と子を結びつけているのは神から与えられた blessingに基づいた、親の子に対する強い愛情であった。

Eppieを夢中で育てているSilasの心の中にただあるのは、金貨をためることとは別の

The new things that would come with the coming years, when Eppie would have learned to understand how her father Silas cared for her; and made him look for images of that time in the ties and charities that bound together the families of his neighbours. (Chap.14)

(エッピーが、父サイラスが自分をどれほど深く愛してくれたかを知るようになったその時になって到来する新しいもろもろの事がらであった。そしてそれらは近所の家の家族をしっかりと

結びつけているきずなどか慈愛の中に、その時の影像を彼に探させるのであった。)

すなわち、George Eliotの考える“家族”というものは、自らが属している村落共同体の中での家族なのであり、近所の家々と同等の立場になって、その村独自の“the unwritten code”の中に取りこまれることを意味した。MarnerはEppieを育てあげることによって名実ともにRaveloe村の一員になり、そして精神的な安全地帯ともいべきそのcodeを積極的に受け入れようとしたのもあった。

このようにGeorge Eliotにとって子供とは、その誕生の時点で女性への祝福となり、成長すると共に夫婦の、特に父親の精神的な支えであり、地域共同体の中においては社会生活の潤滑油であり、また人類の末長い繁栄の約束の泉でもあった。

George Eliotの小説を一読しただけでわかる彼女の子供礼賛は、彼女の、上に記したような子供に対する考え方によるもので、主に自然と人間の関係の中でのみ子供をとらえようとするWordsworthの児童観と比べて、かなり広範な視点であるといえよう。

8

特に女性特有の能力である出産に伴うmotherhood(母性)を祝福(blessing)であるとする考え方は、George Eliotが女性であるからこそその特有の考え方ではないだろうか。そしてそのblessingは神から特別女性に与えられたものであるから、そのblessingを受けるべき状況設定が彼女の頭の中で行われる。Nancyがついにそれを得られなかったように、George Eliotの小説の中では、数々生まれたカップルのうち子供がいない夫婦に、夫か妻か道徳上の罪があったり、周囲から全面的な祝福が得られない無理のある結婚の場合が多い。それはその昔Shakespeareが結婚の問題を自分の劇の主要テーマとする時、例えばOthelloとDesdemonaの場合のように、誰がみても二人の結婚が不自然であったり、また周りの人々の祝福が得られないものであったりすると必ず悲劇的結末を迎えたのと類似している。

George Eliotの小説がWorthworthianであると同時にShakespearianであるといわれるのはこのようなところに起因するものであろうが、George Eliotの場合は母性へのblessingを女性から剥奪するだけであるからShakespeareが劇の中で行った人間の生命の剥奪よりずっとずっとやさしくみえる。しかしGeorge Eliotの意識の中では子供が生まれないということは夫婦にとってこのShakespeareの悲劇にも匹敵する重く悲しい重大事だったのかもしれない。

George Eliotの子供礼賛は、彼女の一番最初の刊行本*Scenes of Clerical Life*の中の第三話、*Janet's Repentance*にすでに現われている。それはJanetと夫Dmpsterの間が悲惨なものになってきた時のJanetのあわれなありさまを紹介する場面においてであるが、George Eliotは次のように言っている。

If she had had babes to rock to sleep—little ones to kneel in their night-dress and say their prayers at her knees—sweet boys and girls to put their young arms round her neck and kiss

away her tears, her poor hungry heart would have been fed with strong love, and might never have needed fiery poison to still its cravings. (Chap. 13)

(もしも彼女にゆりかごをゆすって寝かせる赤ん坊があったなら一寝まきを着てひざまずき、彼女のひざもとでお祈りをする小さな子供—幼い腕を彼女の首に巻つけて彼女の涙をキスでぬぐってくれるかわいい子供たちがあったなら、彼女のかわいそうな飢えた心は強い愛情で満たされてその渴望をいやすためにあんな火のような毒を必要とはしなかったであろうに。)

その後すぐに長い長い母性 (motherhood) 礼賛へと続いていくのであるが、George Eliotのこの子供礼賛、母性礼賛の気持ちは彼女の小説制作の最初から異常と思われるほどの強い力を込めて記されている。このことは*Scenes of Clerical Life*が出版されたのが1895年であり、George EliotとLewisとが同棲を始めて四年後であったことと大いに関係が深いのではないだろうか。

すなわち紀要11号の筆者の論文の中でも述べたように、イギリス史上もっとも道德律の厳しいQueen Victoriaの治世にあって、妻子あるLewisとの同棲は、彼女を故郷からも親兄弟知人からも追放する絶大な事件であった。Janetのように夫との間の軋轢による悲しさ寂しさではなかったけれども、Wordsworthの自然観に共鳴していたことから察せられるように、George Eliotにとって自分の人生を規定するとまで思い、深く愛していたふる里喪失は、測り知れない寂しさとなって彼女を襲ったに違いない。それと共に、Lewisと結婚してからそれまでの四年間も子供ができなかったことは、すでに40歳に近い年齢からして我子を持つことへの絶望的な予感を深めたものと思われる。2の部分で引用した*Adam Bede*の17章の、オランダ絵画を絶賛している彼女の芸術論からもわかるように、人間として自然に生きることを奨励し、特殊な人生を生きることに全く価値を置いていないGeorge Eliotが女性の特権であるこの出産というblessingと、そして我子をいつくしみ育てることへの憧憬を心に抱いていなかったはずはない。

Lewisとの同棲のために喪失したものによって自分の生きる基盤をなくしたような寂しさに襲われていたGeorge Eliotが、上記の引用のような窮地に陥っているJanetと我身をすりかえていたと考えるのもあながち無理はないであろう。かけがえのないものを喪失したことへのその寂しさは、もし自分に子供があったならどんなに堪えやすいものであろうかと、Janetの立場を借りて述べ、自分には訪れる様子のないMotherhoodへの羨望と諦念が、以後のGeorge Eliotの全小説を貫く一つの思潮にもなるのである。

結局JanetとDempsterは破局を迎えるのであるが、JanetがDempsterを夫に選ぶ時点で友人達の大きい反対があったのである。Janetが子供を持てなかったこと、そして夫との悲劇的な結末を迎えたことの中にGeorge EliotはJanetの、友人の反対をおし切って敢行したその結婚にNemesis (復讐の女神) の力を置く。

*Middlemarch*のDorotheaも、年の違いや性格等々のことで妹Celiaによって強く反対されたCathobonとの結婚によっては子供ができず、またRosamondとLydgateの、Rosamondの両親に強く反対された結婚の場合も最初の子供が流産することによって、夫婦の間の亀裂がより深く

なっていく。それらはみんな、祝福されない結婚に対してGeorge Eliotが招来させたNemesisの力によるものであろう。

また子供が生まれたとしてもその誕生が神のblessingを受けないものであるmotherhoodにはより恐るべきNemesisを招来させる。例えば*Adam Bede*の中でHetty Sorrellは、農民の娘と地主の息子という極立った身分の差のための禁じられた恋のかたみの嬰兒を森に捨て死に到らしめたことにより、我身を絞首台に送ることになる。

また*Felix Holt the Radical*の中でまず第一章からMrs Transomeは15年ぶりに再開した一人息子Haroldに対して、息子がもはや自分の手の届かないところを、援助の手も求めないで一人で歩いている存在でことを知り大きなショックを受けている。Mrs Transomeの心に鮮明に残っている30年前のHaroldは、

the little round-limbed creature that had been leaning against her knees, and stamping tiny feet, and looking up at her with gurgling laughter. (c h a p. 1)

(彼女のひざにもたれ、クックとのどをならしながら自分を見上げているぷっくりふくれた手足をした赤ん坊)

であった。そしてMrs Transomeは

the possession of this child would give unity to her life, and make some gladness through the changing years that would grow up as fruit out of these early maternal caresses. (Chap.1)

(この子を持っていれば生活に統一が得られるし、子供が幼い頃のこうした母性的な愛撫から結実してゆく変容の年月の間も何がしかの喜びとなることであろう。)

と思っていたのだ。しかし彼女が期待したとうりのことは何一つ起こらなかった。このMrs Transomeの息子への失望感は物語の進展につれさらに深いものになる。

初老を迎える期に及んでいる高貴な婦人Mrs TransomeをGeorge Eliotはどうしてそれほどまで追いつめているのであろうか。George Eliotの頭の中ではすでに*Felix Holt*の最初からMrs Transomeに対してNemesisが頭をもたげていたのである。

すなわちHaroldはMrs Transomeと夫との間の子供ではなく、Transome家の顧問弁護士JermynとMrs Transomeの不義の子供であったのである。このことはMrs TransomeとJermynとの当事者しか知らない事実であったが、George Eliotからすればそのような出生の秘密を持った母性にblessingなど求められるはずはなかった。かくしてMrs Transomeはかつての誇り高き愛息Haroldによって精神的な奈落にどんどん引きこまれていく。

*Silas Marner*においても同様に、母親と父親という立場は違うけれども、Mollyが死んだ時点で、Marnerの手許に委ねるという形で闇に捨てた我子を、16年後に子のない寂しさに堪えかねて、自分が本当の父親であることをMarnerに告げEppieと共に暮らす権利が自分にあること

を主張したGodfreyがEppie自身の口からそれを断固として拒否された場面においても、George EliotはそのGodfreyの身勝手さにNemesisを与えたのであった。またGodfreyに与えられたそのNemesisは、地主という特権階級にある人達のもつ高慢さ、身勝手さ、それにmoralの面での意識の低さへのNemesisでもあり、そういった考え方がGeorge EliotがRadicalであるといわれる根拠でもあるのである。

つまりGeorge Eliotの考え方によれば、紀要11号の*Adam Bede*についての論文の中にも述べたように、女性が子供を生むということの中には、子孫繁栄のための神から与えられた祝福と、Eveの原罪による罰としての生む性との二つの側面があり、祝福されるべき子供の誕生は、何のかけりもない暖かい祝福に満ちた結婚によるものでなくてはならない。その考え方がすでに彼女の最初の刊行本の中の一つのお話*Janet's Repentance*にみられ、彼女の小説全体に共通した思想となっていることは、自分自身が待望の子供を持てなかったことに対して、妻子あるLewisとの恋愛、結婚が、そういった形でNemesisを招来したのでであると自ら解していた証とも解釈されるであろう。George EliotはLewisとの生活が幸せであればあるほど、自らが犯した道徳的な罪を深く深く意識したのではないであろうか。

9

*Silas Marner*の中で並行して進行していたMarnerを中心とする筋とGodfreyを核とする筋は、Dunstenの死体と共にMarnerの16年前に盗まれたお金が発見されたことがきっかけで、GodfreyがNancyに以前の誤った結婚のこと、Eppieがその結婚によって生まれた実の娘であることを告白したことによりたちまち一つに統合される。そしてEppieがGodfreyとNancyに「赤屋敷 (Red House)」に行くことを拒否した時点で完全なMarnerの救済があった。しかしそれはGodfreyをも救う結論だったのであるか。

Walter Allenが「*Silas Marner*は救済の物語であるがそれはSilasの救済ばかりを扱っているのではない」と言ってGodfreyの救済もほのめかしていることについてはこの論文の3の部分ですでに述べた通りである。Godfreyのプライドは表面的にみれば、よもやそのようなことはありえないと思っていた、自分の娘(すなわち地主の娘)になってladyになることへの提案をEppieが断ったことで、台なしにされ、Godfrey自身絶望の中につき落とされた感強い。しかしGodfreyはMarnerのところですくすくと育てゆくEppieを見るにつけ、ずっと「何の疑いを招くこともなく自分の娘の幸せを図ってやる日がきつと来る」(Chap.15)だろうと思っていたのであった。そしてさらにEppieに対して「彼は十分面倒をみていくつもりであった。それは父親の義務である」(Chap.15)と固く心に誓っていた。彼にとってEppieは、誰にも知られてはならない自分の過去の汚点の権化ではあったが、Godfreyはかねてより娘の幸せを願う父親の自覚は十分にあったのである。

とはいえその時の頭の中に描かれた将来の構図には自分とNancyとの間の子供が何人もいたのであり、EppieをRed Houseに引きとることは毛頭考えてはいない。しかし現実にはCass家の後継者としてRed Houseに迎え入れるという決意が変わる。それがEppieの拒絶の言葉に

よっていともやすやすと覆され、高慢なGodfrey, Nancyからすればそれは救済どころではなかったであろう。

しかしNancyに自分の過去を打ち明け、Marnerに自分がEppieの父親であることを名乗って出たところにすでにGodfreyの救済の萌芽があったのではなかろうか。Godfreyの過去に犯した罪、Mollyを死に至らしめた冷たいしうち、Eppieを我子と認知しないままMarnerに任せていたこと等々を考えれば、何の咎めだてもなく過去の自分の誤ちに対してNancyの理解が得られ、そしてEppieにも今後は初期の思いの中にあつたとおり、気がねなく父親らしい娘の幸せを図る行為ができるようになったことだけでもGodfreyには最高の救済になっていると考えられる。Godfreyの救済はEppieがあれば強くRed Houseに引きとられることを拒否はしたものの、その後Godfreyの“わが子への父親らしい善意”はすなおに受け入れている事実によって成し遂げられたものと解釈することができよう。

要するに*Silas Marner*の二つのinner circleの核であるSilasとGodfreyは共に救済を必要としていたが常に正しく生きてきたにもかかわらず不運に見舞われたSilasはともかく、Godfreyの救済は読者の気持ちの中に求むべくもなかったのである。Godfreyの過去の誤ちに対するNemesisとしてGeorge EliotはNancyとの間に待望の子供が一人もできなかったこと、そして自分の手許にEppieを引きとることをEppie自身に拒否されるという運命をGodfreyに与えているが、先に述べたような以前と変わらないNancyのGodfreyに対する献身的な愛情や、またEppieのGodfreyの愛情に対するすなおな気持ちは、そのNemesisの力を大いに弱めるものとなるであろう。*Adam Bede*の中でのArtherの取扱いにおいてもみられたように、地主階級への批判が強いわれ、そこにRadicalismを見い出されるGeorge Eliotであるが、このGodfreyの取扱いについても彼の過去の道徳的な罪の大きさからすれば作者はかなり懐柔策を与えているのを感じるのである。George Eliotには地主階級を徹底的に批判しきれない部分がどうしてもつきまとっているのである。

とにかく*Silas Marner*には救済されるべき者が二人いるが、救済する者はEppieという少女一人なのである。Eppieがその二人を救済する方法としてはこれは最良のものだったのではないだろうか。しかし、何事も思い通りに運んできた苦勞知らずの地主の息子Godfreyにとっては、そのNemesisの力は読者がみるよりもずっとずっと強いものとして身にこたえていたのかもしれない。Eppieの結婚式の当日、Raveloeの村人たちがこぞって祝う席に所用ということで⁸⁸⁾姿を見せなかったからである。George Eliotの子供礼賛の気持ちからすればGodfreyに対する一見やさし過ぎるようなこのNemesisも、彼女の精一ぱいのしうちだったのかもしれない。

すなわち子供とはGeorge EliotにとってはConclusionの章でNancyの姉Priscillaの'I could ha' wished Nancy had had the luck to find a child like that and bring her up. I should ha' had somthing young to think of then. (「ナンシーもあんなかわいい子を運よく見つけて立派に育てあげていたらどんなにかよかったかしら。そうすれば私だって何かと思いをかけてやれる小さい子が持てたんですものね)」という言葉に対する父親のMr Lameterの'one feels that as one gets older. Things look dim to old folks ; they' d need have some young eyes about'

em, to let' em know the world's the same as it used to be' (「人は年をとるにつれてそんなふうを考えるものだよ。年よりには物がぼんやりしか見えなくなってくるからね。世の中が昔とちっとも変わっていないってことを知るためにも、周りに若い者の目が必要なんだ)」という言葉からもわかるように、老いゆく人にとっての新しい命のいぶきであり、世代交代の頼もしき力、すなわち子孫繁栄を約束する大いなる力でもあった。このようにGeorge Eliotの児童観は究極のところでWordsworthの児童観と一致する部分を持ちながら、女性の母性の側から、あるいは子供を産むということの中にある真実から子供の存在意義を考えるという点で彼女独特のものとなっていると解することができる。

(1989年12月28日)

注

本文注のWordsworthの詩の引用はCENTURY READINGS IN ENGLISH LITERATURE, Fifth Editionを定本とし、*Silas Marner*の引用はThe Penguin English Library (1978. Great Britain) を定本とした。

- (1) 「ジョージ・エリオットの小説」(和知誠乃助, 南雲堂 1966年) P.121
- (2) *Silas Marner*(Penguin Books Introduction) P.12
- (3) 同上 P.12
- (4) 前出「ジョージ・エリオットの小説」 P.116
- (5) Penguin Booksの*Silas Marner*のIntroductionの筆者, 著名な文学評論家Dr F. R. Leavisの未亡人
- (6) 前出*Silas Marner*のIntroduction P.9
- (7) 「イギリス文学史」(斎藤勇, 研究社, 昭和39年) P.295
- (8) 同上
- (9) 以上Romanticismの説明Wordsworthの解説は前出「イギリス文学史」による
- (10) Wordsworthの*Michael* 1.33
- (11) 前出「イギリス文学史」 P.313
- (12) 前出「イギリス文学史」 P.308
- (13) 「ジョージ・エリオットの小説」—分析と再評価—(藤田清次, 北星堂, 昭和50年) P.49
- (14) 前出*Silas Marner*のIntroduction P.13
- (15) 前出 南雲堂の「ジョージ・エリオットの小説」 P.115
- (16) 前出*Silas Marner*のIntroduction P.25
- (17) フランスの歴史研究家(Philippe Ariès, 1914年生まれ)
- (18) みすず書房, 杉山光信・杉山恵美子訳 1987年
- (19) 英米児童文学史 (研究社, 瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫著 1979年)
- (20) 前出*Silas Marner*のIntroduction P.28
- (21) 同上
- (22) 頌: 技巧的なまたは不規則な韻律型を有し高揚した感情を表現する叙情詩の一種(ランダムハウス英和大辞典)
- (23) 前出 英米児童文学史 P.93
- (24) *Oliver Twist* (by Charles Dickens,Penguin Classics,Great Britain,1988) P.268
- (25) *Michael* 1. 206
- (26) *The Story Bible*, Volume I: The Old Testament (by Pearl S Buck,A Signet Book,Canada,

1971) P.25

- (27) 同上 P. 30 洪水のあと神は空に虹をかけ 以後二度と洪水を起こして地上の人を滅ぼすことはしないと、ノアと約束し虹を契約の印とした
- (28) 前出*Silas Marner*のIntroduction P. 18
- (29) 同上
- (30) 同上
- (31) 同上 P. 19
- (32) *The English Novel* (a Pelican Book, by Walter Allen 1965. Great Britain)
- (33) *Michael*, by Wordsworth
- (34) 前出*The Story Bible*の中のThe Fate of Sodom参照
- (35) *Silas Marner*. Chap.15 「約束の地」—旧約聖書創世紀12. 7 参照
- (36) *Silas Marner*. Chap. 3 でCass家の息子たちが墮落しはじめた原因が母親が死んで母の愛が家庭内に不在であったことをあげている
- (37) 前出*Silas Marner*のIntroduction P.28
- (38) *Silas Marner*のConclusion

参考文献

- (1) 世界名詩集大成 9 イギリス I (平凡社, 昭和38年)
- (2) *A Tale of Two cities* (by Charles Dickens, The Penguin English Library, 1978)
- (3) *Adam Bede* (by George Eliot, Collins CLEAR-PRESS, London and Glasgow, 1963)
- (4) *Felix Holt the Radical* (by George Eliot, Everyman's Library)
- (5) *Middlemarch* (by George Eliot The Penguin English Library)
- (6) *Othello* (by Shakespeare, The Arden Shakespeare. Methuen & Co Ltd)
- (7) *Scenes of Clerical Life* (by George Eliot, Penguin Classics)
- (8) 異文化としての子ども (本田和子 紀伊国屋書店, 1988)
- (9) 上田女子短大紀要11号・*Adam Bede*にみるGeorge Eliotの女性観について